広島大学　高等教育研究開発センター　大学論集
第 42 集（2010年度）2011年 3 月発行：143－158

ドイツにおける近代大学理念の形成過程

金　子　　勉

ドイツにおける近代大学理念の形成過程

金　子　　勉*

1．フンボルト大学論の再検討

本稿は，ベルリン大学の創立前後から約100年間に展開した大学論の軌跡を再検討することにより，ヴィルヘルム・フォン・フンボルトのベルリン大学設置構想がドイツの大学理念として確立する過程と，ベルリン大学創設の理念を示す文書として広く知れ渡っている「ベルリンの高等学問施設の内的及び外的組織について」（以下「覚書」と略す）を記述したフンボルトの意図を解明することを目的とする。

ベルリン大学が開学したのは1810年10月であるが，フンボルトの「覚書」は長年にわたり存在することを知られることなく，19世紀末に発見された。このことに着目したブルッフは，1999年に公表した「フンボルトから緩やかに離脱したのか？」と題する論文で，フンボルトの後任としてベルリン大学の創設を担当したシュックマンはフンボルトの理念に同調しなかったのであり，むしろベルリン大学はシュライエルマッハーの思想に基づいていると指摘した（Bruch, 1999, S.50）。さらに，パレチェクは，「フンボルトのモデルは19世紀のドイツの諸大学に普及したか？」と題する2001年に公表した論文において，19世紀における大学改革の議論の中でフンボルトが語られることはなく，フンボルトのモデルが普及した痕跡を確認することはできないと指摘した（Paletschek, 2001, S.76-77）。

パレチェクは，フンボルトの大学理念を普及させたのは，シュプランガーが最初であったという（Paletschek, 2001, S.100-103）。1910年に刊行したシュプランガーの『大学の本質について』は，フィヒテの「ベルリンに創立予定の高等教授施設の演繹的プラン」，シュライエルマッハーの「ドイツ的意味での大学についての随想」，シュテフェンスの「大学の理念について」に加えて，シュプランガー自身による序文を収録している。シュプランガーは，その序文でフンボルトを取り上げたのである（Spranger, 1910, S.XL）。さらに，潮木が，『大学論集』に掲載された論文「フンボルト理念とは神話だったのか―パレチェク仮説との対話―」と，著書『フンボルト理念の終焉―現代大学の新次元―』において分析を深め，「プロイセンの学問と高等教育の現在の組織は，ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの思想に基づいている」という一節を含むベルリン大学の創立100年記念祭におけるドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の演説を起草したハーナックこそが，フンボルトの大学理念を普及させたと指摘した（潮木 , 2008, 200-202頁）。

しかし，19世紀に刊行された文献を精査すると，フンボルトがベルリン大学の創設において重要

＊京都大学大学院教育学研究科准教授

な役割を果たしたことを示唆する記述を見出すことができる。フンボルトのベルリン大学設置に関する公式の文書が存在したのであり，それは「覚書」とは別の文書であった。その文書は「ベルリン大学創設に関する建議」（以下「建議」と略す）であり，1846年に刊行されたフンボルトの著作集に収録されている（Humboldt, A. v., 1846, S.325-332）。これはヴィルヘルム・フォン・フンボルトの弟であるアレクサンダー・フォン・フンボルトが編纂した著作集である。そこに収録されている「建議」には，1809年7月10日の日付があるのだが，この日付には注意する必要がある。1860年に刊行されたケプケの著書『ベルリン大学の創立』の巻末史料では，同一内容の文書の日付が7月24日となっているからである。この点について，フンボルトが起草したのが10日であり，正式の文書となったのが24日であると，ケプケは説明している（Köpke, 1860, S.68）。

ところで，パレチェクの論文は，「建議」の存在に言及しているものの，1846年に刊行された著作集に「建議」が収録されていることに言及していない。パレチェクの論文では，フリットナーが編纂して1982年に刊行された比較的新しい著作集に収録された「建議」を典拠としているのであり，そこに19世紀の前半にフンボルトの「建議」が公表されていたことを確認する記述が見あたらない（Paletschek, 2001, S.81）。1846年に刊行された著作集を参照した論文としては，2002年に刊行されたシャレンベルクの著書『フンボルトの旅』がある。「建議」は外的組織について述べるにすぎないのであり，内的組織を含む「覚書」とは区別すべきだとして，シャレンベルクは「建議」と「覚書」の相違点に着目したのであるが，内的組織と外的組織とは何であるのか具体的に説明していない（Schalenberg, 2002, S.18）。

このことについて，ゲープハルトの論文「教育大臣としてのフンボルト」を参考にするならば，内的組織は高等学問施設と学問との関係，外的組織は高等学問施設と国家との関係と解釈することができる（Gebhardt, 1904, S.538）。「建議」に欠落しているとされる内的組織の内容は「学問をいまだ完全には発見しつくされていないものと見て，不断にそれを追求し続ける」という原則にほかならない。これはドイツの大学理念の根幹に関わる原理であると解釈されてきたのだが，たしかに「建議」の中に内的組織に直結する文言を見出すことはできない。

かつて，パレチェクと潮木の研究に触発されて執筆した拙稿「大学論の原点」では，フンボルトの大学構想として，「覚書」のほかに，1809年7月にプロイセン国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム3世へ上奏した「建議」があることと，「建議」に書かれた構想が19世紀にプロイセンの諸大学で普及したことは，各大学の規程を見比べれば明白であることを指摘した（金子, 2009, 215-216頁）。「建議」で提言され，プロイセンの大学に普及したフンボルトの構想とは，大学とアカデミーと学術施設（wissenschaftliche Institute）の連合体を構築することであった。フンボルトは「覚書」において，アカデミー，大学，補助施設（Hülfsinstitute）の三者が高等学問施設の構成要素であると述べているから，「大学論の原点」では「建議」と「覚書」を根本において内容が同一の文書であると認識したのであった（金子, 2009, 216頁）。

このように「大学論の原点」ではいわば「建議」と「覚書」の類似点に着目したのであったが，本稿では両者の相違点を意識しながら先行研究を再検討することにより，「覚書」に込められたフンボルトの真意を探求していく。

2. ディーテリチとケプケのフンボルト論

(1) ディーテリチのフンボルト論

まず，フンボルトの「覚書」が，ゲープハルトの著書に引用された1896年まで世間に知られていなかったことを根拠として，フンボルトの大学理念が19世紀のドイツにおいて大学改革に影響していないと結論することの是非について検討する。この問題を解決するには，フンボルト大学論の系譜を解明する必要がある。上述のように，ベルリン大学設置の構想に関するフンボルト大学論は，1846年の『フンボルト著作集』に収録された「建議」まで遡及できることは明らかである。とはいえ，『フンボルト著作集』が刊行された当時における「建議」の客観的な評価は不明である。そこで「建議」の位置づけを明確化するために，ケプケの『ベルリン大学の創設』が刊行された1860年より以前に刊行され，フンボルトの大学論に言及する文献を探し出すことから，フンボルト大学論の系譜を解明する作業に着手する。

ここで注目するのが，フンボルトが死去した翌年にあたる1836年にディーテリチが公表した『プロイセンの諸大学の歴史と統計に関する報告書』である。この書物は，グライフスヴァルト大学，ブレスラウ大学，ケーニヒスベルク大学，ハレ＝ヴィッテンベルク大学，ベルリン大学，ボン大学のほか，当時のプロイセンに属した高等教育機関の状況を概説している。ディーテリチは，同書中のベルリン大学に関する記述で，フンボルトに言及している。そこでは，ベルリン大学の発足に貢献のあった人物として知られるシュマルツ，フィヒテ，ヴォルフ，シュライエルマッハー等よりも，フンボルトが格段に重視されて功績を語られている。特に注目すべき点は，フンボルトの起草した「ベルリン大学の設置に関する完璧な構想」（以下「構想」という）に言及しているところである。ディーテリチによると，「構想」は1809年5月12日に作成された文書である。その中で，ディーテリチが最も重視して引用したのは「国境を越えた影響力を国家に与え，ドイツ語圏の国民の人間形成に作用することができるのは，大学のみである」という趣旨の部分である（Dieterici, 1836, S.60-74）。

ディーテリチの記述は，その後のベルリン大学に言及する書物に影響を及ぼした。コッホが編纂し1839年に刊行された『プロイセン諸大学の規程集』では，ベルリン大学の歴史に関する解説の中で，ディーテリチによるベルリン大学に関する記述の大部分が，原文のまま引用されている（Koch, 1839, S.30-32）。また，シュレジエルが1845年に著した『フンボルト回想』においても，ディーテリチの記述を参照して「構想」に言及しているし（Schlesier, 1845, S.178-180），さらに，レンネは1855年に公表した『プロイセンの教育制度』の中でディーテリチの記述を部分的に引用し，そこでフンボルトの「構想」が存在したことを示している（Rönne, 1855, S.413-414）。

ディーテリチは，著書の中で，フンボルトの完璧な「構想」の一部を引用しているにすぎないのだが，「構想」の日付が1809年5月12日であることを手がかりにして，全文の内容を見出すことができる。この「構想」は，ゲープハルトが編纂し，1903年に刊行された『フンボルト全集』に，「ベルリン大学の設置に関する建議」として収録されている（Gebhardt, 1903, S.139-145）。「構想」と「建議」の標題は同一であり，両者は，大学，アカデミー，学術施設の連合体を形成することに言及し

ているなど内容の重複が少なくないものの，全体の構成を比較すると異なる部分が目立つ。レンツが，1910年に著した『ベルリン大学史』（Lenz, 1910, S.169）において「構想」を「建議」の草案と呼んでいるから，「構想」は公式の文書に至らなかったようである。

しかし，両者の関係は当時においてもわかりにくかったらしい。ハイムは，1856年に刊行された『フンボルトの経歴と性格』において，ディーテリチが日付を5月12日としているのは，7月10日が正しいのではないかと指摘している（Haym, 1856, S.270）。ハイムは，ディーテリチの称賛した5月12日の日付のある「構想」が存在したことを直接には確認できなかったために，1846年に刊行された『フンボルト著作集』に収録された7月10日の「建議」と混同したのであろう。これらは，フンボルトの大学論が19世紀の前半において認識されていたことを示す根拠となるのであるが，ディーテリチが著書の中で「建議」ではなく「構想」を用いたのは何故だろうか。

フンボルトは「構想」の中で，ベルリン大学に関する事柄のほかに既設の2大学に関する方針に言及している。当時，プロイセンの大学といえば，ケーニヒスベルクとフランクフルト・アン・デア・オーデルの2大学であり，前者は従前の整備により良好な状況にあったが，後者は教授を招聘し，学術施設を整備しても改善する見込みがないと，フンボルトは判断した。その結果として，フランクフルト大学は閉鎖となり，ブレスラウに移転して新大学創設の基礎になった。この内容は，ディーテリチの著書に引用されていないのであるが，プロイセンの全体にわたる完成度の高い構想が，すでに1809年5月の時点に出来上がっていたことを強調したかったのであろう。

(2) ケプケによるフンボルト論の受容

ディーテリチが著した『プロイセンの諸大学の歴史と統計に関する報告書』は，公表されてから約20年間，フンボルト大学論の拠り所であった。しかし，その後，ディーテリチの著作自体が忘却されたらしい。1860年に刊行されたケプケの著書『ベルリン大学の創立』に，ディーテリチの著作とフンボルトの「構想」が見あたらない。ケプケの著作はベルリン大学の創立50年にあわせて刊行されたうえに，同書はベルリン大学の創立に関連する史料を豊富に収録しているから，ベルリン大学の歴史を語るとき，しばしば引用される重要な文献である。たとえば，経済学者で，ベルリン大学の学長であったワグナーが，1896年8月に行った「ベルリン大学の発展」と題する演説で，「ドイツ諸大学の頂点に立ち，今や世界をリードする大学になろうとしているベルリン大学の隆盛はフンボルトの功績である」と絶賛したときに，ケプケの著作は最大の拠り所であった（Wagner, 1896, S.41-43）。また，ゲープハルトが編纂した『フンボルト全集』は，フンボルトの著作のひとつひとつに初出を明示しているのだが，そこにケプケの著作に収録されていると注記のあるものが少なくないのである。ケプケが先行研究を見落とすとは考えにくく，少なくともシュレジエルの著作は，次の理由から知っていたはずである。

「ゲッティンゲンに対してミュンヒハウゼンが成し遂げた以上のことを，フンボルトはベルリン大学に対して成し遂げたのだ」という記述が，ケプケの著した『ベルリン大学の創立』にある（Köpke, 1860, S.76）。ミュンヒハウゼンは，ゲッティンゲン大学の創設に貢献した人物として著名である。そのゲッティンゲン大学には，図書館や植物園など，すでに18世紀の間に主要な学術施設が設置さ

れていたのだが，フンボルトの構想は学術施設を大学にとって不可欠の構成要素とした点において，ミュンヒハウゼンより徹底していた。

ケプケは，この部分を記述するにあたり，シュレジエルの著書『フンボルト回想』を参考にしたらしい。同書には「ミュンヒハウゼンがゲッティンゲン大学に対してなしたこと，ワイマール政府がイェナ大学に対してしたこと以上のことを」という，ケプケの記述と酷似する内容があるのだ（Schlesier, 1845, S.177）。しかし，シュレジエルが言及しているディーテリチの著書について，ケプケは何ら言及していない。膨大な史料を基礎とするケプケの著作にしては，重大な欠落があるのだ。ディーテリチとは対照的に，ケプケにとっては公式の文書である「建議」こそが取り上げるべき対象と考えられたのではないか。

3. 一般教授施設の概念

次に，「構想」と「建議」にある「一般教授施設」と，「覚書」の標題にある「高等学問施設」の異同について検討する。

1807年9月4日の勅命で，ベルリンに「一般教授施設」を設置することを命ぜられたのはバイメであった。その後，フンボルトが公教育局長官に着任して事業を継承した。フンボルトの「構想」と「建議」には「一般教授施設」と「一般高等教授施設」の概念が混在しているので，それらの意味を明確にしておく必要がある。とはいえ，難しいことではない。「一般高等教授施設」は「一般教授施設」と「高等教授施設」の複合概念であると見ればよいからである。フンボルトが「覚書」の中で「高等学問施設」を「高等施設」と「学問施設」に分離して解説しているのと同様である。そこでは，「高等施設」は学校に対する概念であり，「学問施設」は実用施設に対する概念であると説明している。これにならうと，「一般教授施設」は専門学校（Spezialschule）の対となる，「高等教授施設」はギムナジウムの対となる概念である。「構想」と「建議」では，「一般教授施設」が当然に「高等施設」であることを確認するために，冒頭で「一般高等教授施設」と表記したのであろう。「一般教授施設」の名称として「大学」を使用し，これに学位授与権を付与することが「構想」と「建議」の趣旨である。

ところが，ほぼ同時期に作成された文書の中に「一般教授施設」が別の概念として使用されている例がある。1809年9月22日の勅命である。これは，ベルリン科学アカデミーに対して発せられたものであり，将来，科学アカデミーが「一般教授施設」の一部になると通告している（Köpke, 1860, S.197）。ゲープハルトは『政治家としてのフンボルト』において，ベルリン大学創設の具体的内容が通知されたことにより，「科学アカデミーに緊急の課題が生じた」と記述している（Gebhart, 1896, S.160）。この文書が，科学アカデミーの独立性にも言及しているとはいえ，全体として見れば，「一般教授施設」の傘下に取り込まれるという懸念を科学アカデミーに生じさせたのは無理のないことである。フンボルトは，すでに1809年8月28日に開催された政府内の会議で提示した「私見」において，アカデミー，大学，学術施設の連合体を「最高学問施設」と呼称していたのであるが（Gebhardt, 1903, S.158），更に「高等学問施設」の概念を考案して科学アカデミー内部の動揺へ対処

するために，科学アカデミーの自発的変革を促す「覚書」を作成したのであろう。

4.「覚書」の正体

(1) 研究と教育の統一について

「覚書」が科学アカデミー変革論であることを証明するには，いくつかの場面において，科学アカデミーに生じた変化と「覚書」の対応関係を確認する必要がある。そして，その関係が，ベルリン大学設置事業との関係と同等以上に密接であることを明らかにする必要がある。

フンボルトの「覚書」が，科学アカデミー変革論であったことを証明するうえで，もっとも容易に見極めることのできるのは，「覚書」の後半において「大学は学問の教授（Unterricht）と普及（Verbreitung）だけを目的とし，アカデミーは学問そのものを拡張（Erweiterung）することを使命とする」(傍点筆者, 以下同じ）という構造には問題があると, フンボルトが指摘するところである。その記述の周辺では「学問が，アカデミー会員によるのと同じくらいに，いやドイツではそれ以上に，大学教師によって拡張されてきたことは事実であり，そして大学教師たちは，まさに教師としての職務を通して，その専門分野の進歩に貢献してきたのである」とか,「大学が適切に整備されていさえすれば，学問の拡張は，大学だけに任せておくことができるのであって，この目的のためにはアカデミーなんかなくてもすむのである」と述べている。フンボルトは，科学アカデミーについて実に手厳しく論評したのであり，一見すると，大学の優位性を強調しているように読めるのだが，そうであろうか。

高等学問施設に学問の教授，普及，拡張の3つの機能を設定して，学問の教授と普及を大学の使命とし，学問の拡張を科学アカデミーの使命とするならば，それは教育と研究の分離を意味する。このような大学と科学アカデミーの役割分担を, フンボルトは「覚書」の中で批判しているものの, 実際には，ベルリン大学令の第1章第1条において「予備教育を修了した青年子弟に，講義及び演習により，普通教育と専門学術の教育を行う」とベルリン大学の目的が規定されたのであり，そこに学問の拡張に関連する目的が含まれていない。「覚書」の記述が，ベルリン大学の具体化に反映していないのである。

他方,「覚書」を，その頃に検討されていた科学アカデミーの変革に関する文書として解釈すると理解しやすい。ベルリン科学アカデミーの変革について，ハーナックはアレクサンダー・フォン・フンボルトが着手し，ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが継承し，最後にニーブールが完成したと説明している（Harnack, 1900a, S.598）。

アレクサンダー・フォン・フンボルトは，1809年7月に科学アカデミー定款草案を起草した。この定款草案は，第1章においてアカデミーの目的を規定している。その第1条で「アカデミーの最重要の目的は，学問を拡張すること」と定め，別項で「教授することにより学問を伝達することは，アカデミーに属するのではなく, 大学及びその他の上等下等の教育施設に属する」と規定したから，研究と教育をアカデミーと大学が分担する構造を想定していた。しかし，この定款草案は，実際には発効していない（Harnack, 1900b, S.343）。

その後，1811年11月25日に，科学アカデミー定款が審議されたときの目的規定の条文は「アカデミーの目的は，まさに学問の徹底的な研究であり，しかも研究対象をまだ完全には発見しつくされていない問題として扱い，アカデミーをして不断にそれを研究する状態を保つことである」となっていたが（Harnack, 1900a, S.601-602），1812年1月24日に制定された科学アカデミー定款では「アカデミーは，学問上の業績を審査するとともに，持続的な研究を実施することを目的とする」と修正されている（Harnack, 1900b, S.367）。前者は「覚書」においてヴィルヘルム・フォン・フンボルトが高等学問施設の性質について説明している部分を，そのままアカデミーの目的としたのであるし，後者はフンボルトの「覚書」にある「アカデミーは，本来，個人の学問業績を，全員が評価するという団体である」と，「アカデミーは，体系化された観察と実験を継続することによっても，アカデミー独自の研究活動をすることができる」という記述と酷似している。フンボルトの「覚書」がアカデミーの目的規定に多大な影響を及ぼしたのであり，紆余曲折があったとはいえ，アカデミーの主目的を学問の拡張から学問業績の審査へと移行させたのは，フンボルトの「覚書」であった。

（2）アカデミー会員の講義権について

次に，「覚書」にある「アカデミー会員は，それ以外の資格をもたなくても，また大学の構成員にならなくても，講義を行う権利をもつべきである」という記述について検討する。この記述に対応するように，1816年10月31日に制定されたベルリン大学令では第8章第2条において，大学で講義する権利をもつのは，「正教授及び員外教授」，「科学アカデミー正会員」，「私講師」であると規定した。これら3種類の教員のうち，「正教授・員外教授」または「私講師」として講義するにはハビリタチオンとよばれる教授資格が必要となる。「科学アカデミー正会員」は，大学教授等の身分がなくても大学で講義することができるのだから，フンボルトの「覚書」に記述されていることがベルリン大学令に反映したことになる。

ただし，このことから「覚書」を大学設置構想であると断定するのは早計である。ベルリン大学令の規定のほかに，科学アカデミー定款の第28条において「正会員は，当地の大学で講義する権利をもつ」と規定しているからである。つまり，アカデミー会員の講義権に関する「覚書」の内容は，ベルリン大学令と同様に，先行して制定された科学アカデミー定款にも反映していたのである。ハーナックの『ベルリン科学アカデミーの歴史』によると，当時，大学教授を兼務する会員が14人，アカデミー会員として大学で講義を開講する会員が10人，いずれにも該当しない会員が11人であったことがわかる（Harnack, 1900a, S.602）。「覚書」では兼務について「多くの学者は大学教師であるとともにアカデミー会員であることが望ましいであろうが，しかし両機関は，そのいずれか一方にだけ所属している人を持つべきである」と記述されているのであるが，それは直接的にはアカデミー会員の処遇の問題であった。

（3）学術施設の所管について

さらに，学術施設の所管に関する遣り取りに着目すると，フンボルトの「覚書」の性質が端的に表れていることがわかる。ベルリン大学令の第7章に学術施設に関する規定があり，その第1条では

「首都に立地する公共の学術施設及び列品所にして科学アカデミー及び芸術アカデミー並びに本大学に連合するものは，あわせて本大学学生の修学と学術奨励のために設置するものとする」とし，第2条において，これに該当する施設として，図書館，美術館，天文台，植物園など11種類の施設を列挙している。大学が教育目的のために，学術施設を使用することは規定から明瞭であるが，学術施設の所属については必ずしも明確になっていない。大学附属とみなしうる施設と，独立性が高く連携しているにすぎない施設が混在していたのであり，ケプケの著書『ベルリン大学の創設』において，独立性の高い諸施設についての記述を割愛したと，あえて注記するほどに，大学から独立した関係にある施設が存在したのである。

「覚書」には，「アカデミーと大学は補助施設を利用することができる」，「補助施設はアカデミーからも大学からも分離されなければならない」と記述されているのだが，この点は，むしろ科学アカデミーの変革に関連する記述であるといえる。特に，アレクサンダー・フォン・フンボルトによる科学アカデミーの定款草案に学術施設に関する規定があったことを見落としてはならない。定款草案では，第2章第9条に「学者の研究活動の手段として，学術支援のために設立する施設がアカデミーに所属する」という条文があって，そこに10種類の施設が列挙されていた（Harnack, 1900b, S.344）。

さらに「覚書」にはアカデミーに向けて定款草案の内容に関わって発せられたことを示す内容が含まれている。「アカデミーは，たとえば解剖室のようにアカデミーと結びつきのなかった諸施設を，大学を通じて利用できることになる」とアカデミーにとってのメリットを「覚書」は語っているのである。ここで例示された解剖室（das anatomische und zootomische Theater）は，解剖学者ヴァルターの管理していた施設を指しているのだが，この施設が科学アカデミー定款草案でアカデミーに所属するとして列挙された諸施設に含まれていないことは，従来ベルリン科学アカデミーと提携関係のない学術施設であったことを示しているといえよう。科学アカデミー側の便宜を強調することにより，大学設置をめぐる懸念を払拭することを意図したのであろう。

以上の検討から，「覚書」は，ベルリン大学の設置構想というよりも，むしろベルリン科学アカデミーに自発的な変革を促すことを目的とした文書であると判断するのが適当であると考える。

5. 大学論としての「覚書」

「覚書」が，本来，科学アカデミー変革論であったとするならば，「覚書」を大学論に仕立てたのは，誰であり，いつのことであったのか。科学アカデミーの変革と関連して「覚書」に言及したハーナックの著作が刊行されたのは1900年であったから，「覚書」が大学論とされたのは，それ以後であったと考えられる。

その当時における大学研究の大家といえば，ベルリン大学の教授として哲学・教育学を担任したパウルゼンである。パウルゼンは，レクシスが編纂し，1893年に刊行された『ドイツの大学』において「ドイツの大学の本質と歴史的発展」と題する巻頭論文を執筆した。この書物は，コロンブスの米大陸発見400年を記念してシカゴで開催された万国博覧会で公表されたから，本書によってド

イツの大学の実態が国際的に知られる契機になったことは容易に想像できる。『ドイツの大学』は，米国の雑誌において，コロンビア大学の教授であったペリーにより書評されているのであるが，その大部分はパウルゼンの論文を称賛するために割かれている（Perry, 1894, pp.209-229）。しかも，パウルゼンの執筆した部分だけがペリーにより英訳され，コロンビア大学の学長であったバトラーの序文をつけて，1895年にニューヨークにおいて出版された。しかし，パウルゼンは，この論文でドイツの大学の特色を解説したものの，フンボルトの「覚書」に言及していない。パウルゼンが，この論文を執筆したのは，ゲープハルトが『政治家としてのフンボルト』を公表して「覚書」の存在が明らかになった1896年より以前のことであった。

とはいえ，フンボルトが大学改革に関与したことを，すでにパウルゼンが承知していたことは間違いない。パウルゼンが1885年に著した『学識教育の歴史』においてベルリン大学の設立を企画した人物としてフンボルトが登場しているのである。しかし，そこにフンボルトが成し遂げた功績を称賛する際立った記述は見当たらない（Paulsen, 1885, S.582）。パウルゼンが，この部分を記述するときに参照したのは，ケプケが1860年に著した『ベルリン大学の創立』であった。

パウルゼンが，フンボルトの功績に言及したのは，1902年に公表した『ドイツの大学と大学教育』においてである。この著書の中で「フンボルトが公教育局長官として着任したときに大学制度の組織に関する諸原則を書きとめた覚書の草稿から，若干の文章を書き出さずにはいられない」として，「覚書」の本文から主要な部分を引用している。たとえば，「孤独と自由が支配的な原理となる」とか，「国家は高等学問施設に本来介入することができないこと，むしろ国家はいつも邪魔であること，国家がなくても物事はうまく運ぶものであることを，常に意識しなければならない」と，これまでドイツの大学理念として語られた著名な部分を強調している (Paulsen, 1902, S.63)。

パウルゼンは同書の中で，未完成のままになっている「覚書」がハーナックの『ベルリン科学アカデミーの歴史』に収録されていることと，ゲープハルトの『政治家としてのフンボルト』を参照すべきことを，注釈において記述しているから，これら2つの文献を参照したことは明らかである。これらの文献において，「覚書」はベルリン科学アカデミーの変革のひとこまとして取り上げられたのだが，パウルゼンは「覚書」を大学側の角度から解釈して，これを大学論に仕立て上げたのである。パウルゼンの『ドイツの大学と大学教育』は，英訳されて1906年にニューヨークで出版された。「覚書」はフンボルトの大学理念を記述した文書であるとする認識を普及する条件が，ここに整ったのである。

ところで，パウルゼンは，1893年に公表した論文「ドイツの大学の本質と歴史的発展」で「研究と教育の統一」という表現を使用している（Paulsen, 1893, S.6）。さらに，1894年に刊行された『ドイツ展望』という雑誌に「教育施設であり，かつ学問研究の場でもあるドイツの大学」と標題のある論文を掲載している。ところが，どちらの論文においてもフンボルトの功績に言及していない。「覚書」の存在を知らないパウルゼンが展開したドイツ型大学の特質についての議論は，英仏独の諸大学に関する比較研究を基礎としていたのである。特に，アカデミーが発達し，研究機関として地位を確立していたフランスの事情と比較して，ドイツの大学は，科学アカデミーと，高等教育機関を意味するホッホシューレの性質を併せもつと説明されたのであった。

6. 派生的問題について

本稿では，19世紀前半においてフンボルトの大学論として「構想」と「建議」が知られていたことと，20世紀初頭にパウルゼンが「覚書」を大学論とする解釈を確立したことに着目して，ドイツの近代大学理念の形成過程を解明した。さらに，フンボルトの「覚書」を科学アカデミー変革論として再評価することの必要性をも指摘した。このことをふまえて，本稿から派生する問題として，次の2点を指摘する。

まず，パウルゼンの著作が刊行された19世紀末から20世紀初頭にかけては，ドイツ・モデルの大学教育を日本の大学に導入することを主張した教授たちが，ドイツ留学を経験した時期にあたるので，日本の大学史研究に対して提示する知見に付言しておきたい。すなわち潮木による「高根をはじめ，京大法科の教授陣は，誰一人『フンボルト理念』という言葉を使っていない」（潮木 , 2008, 199頁）という指摘に対して，解答を得ることができるのである。

京大で商法を担任した高根義人がベルリン大学に留学・在籍したのは，学籍登録の記録によると1896年から1898年までであった。ドイツから帰国したのち，1902年に「大学の目的」と「大学制度管見」を著している。これらの論文を執筆するにあたり，高根が1902年に出版されたパウルゼンの『ドイツの大学と大学教育』を参考にしたとは考えにくい。むしろ，1893年に公表された「ドイツの大学の本質と歴史的発展」あるいは1895年に刊行された同論文の英語版を参照した可能性が高い。高根の「大学の目的」には「独乙ニテハ初ヨリ大学ヲ以テ単ニ学術ヲ教授スル所ト為サスシテ学問其物ノ養成所タルコトニ着眼セリ」とある（高根 , 1902a, 279頁）。また，「大学制度管見」には「大学ナルモノハ専門知識ノ教授所タルニ止ラス主トシテ学問研究所トシテ学問ノ進歩発達ヲ目的ト為スヘキモノナリ」とある（高根 , 1902b, 672頁）。これらと同一の表現がパウルゼンの論文に書かれていることは，前述の通りである。高根はフンボルトを媒介にすることなくドイツ型大学の特質を語ることができたのである。

次に，シェルスキーが1963年に著した『孤独と自由』と本稿の結論との関係について述べておきたい。シェルスキーはフンボルトの大学改革を論ずるにあたり，「これらの施設はできるかぎり学問の純粋理念に仕える場合にのみ，その目的を達成し得るわけであるから，孤独と自由とがその関係者たちを支配する原理である」という部分を「覚書」から引用している。しかし，シェルスキーは1809年9月にフンボルトが作成した「リトアニア学校計画」にある「人間が自分自身で見出さなければならないもの，つまり，純粋な学問に対する認識は，大学のために取っておくべきである。本来の意味におけるこうした自発活動には，自由とその助けとなる孤独とが必要である」という記述をもふまえて，「孤独と自由」を大学論の文脈で論じている（シェルスキー , 1970, 74-75頁）。決して「覚書」だけを根拠として「孤独と自由」に言及しているのではないのである。とはいえ，論述の根拠に「覚書」がある以上は，記述された内容の妥当性を再検討する必要性が生じたと認識すべきであろう。

【参考文献】

潮木守一（2007）「フンボルト理念とは神話だったのか―パレチェク仮説との対話―」『大学論集』第38集，171-187頁。

潮木守一（2008）『フンボルト理念の終焉？―現代大学の新次元―』東信堂。

金子勉（2009）「大学論の原点―フンボルト理念の再検討―」『教育学研究』第76巻第2号 , 208-219頁。

ヘルムート・シェルスキー（田中昭徳ほか訳）（1970）『大学の孤独と自由』未来社。

杉浦忠夫（2008）「ベルリン大学創設前後 (1)―フンボルトの「覚え書」からフィヒテの学長就任演説まで―」『明治大学教養論集』通巻431号，57-78頁。

杉浦忠夫（2009）「ベルリン大学創設前後 (2)―フンボルトとシュライアマハーとのあいだ（その1）―」『明治大学教養論集』通巻444号，1-17頁。

高根義人（1902a）「大学の目的」『法律学経済学内外論叢』第1巻，278-282頁。

高根義人（1902b）「大学制度管見」『法律学経済学内外論叢』第1巻，669-706頁

ヴィルヘルム・フンボルト（梅根悟訳）（1970）「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」梅根悟編訳『大学の理念と構想』明治図書，210-222頁。

別府昭郎（2002）「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとベルリン大学創設の理念」『教育学研究』第70巻第2号，185-196頁。

Bruch, R. v. (1900). Langsamer Abschied von Humboldt? Etappen deutscher Universitatsgeschichte 1810-1945. In M. G. Ash (Hg.), *Mythos Humboldt. Vergangenheit und Zukunft der deutschen Universitat.* Wien: Bohlau. S.29-57.

Dieterici, W. (1836). *Geschichtliche und statistische Nachrichten über die Universitäten im preussischen Staate.* Berlin: Duncker und Humblot.

Dunken, G. (1960). *Die Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin in Vergangenheit und Gegenwart.* 2. Aufl. Berlin: Akademie Verlag.

Gebhardt, B. (1896). *Wilhelm von Humboldt als Staatsmann. Bd. 1.* Stuttgart: J. G. Cotta.

Gebhardt, B. (Hg.)(1903). *Wilhelm von Humboldts Politische Denkschriften. Bd. 1.* Berlin: B. Behr.

Gebhardt, B. (1904). Wilhelm von Humboldt als Unterrichtsminister. In *Deutsche Monatsschrift für das gesamte Leben der Gegenwart. Bd. 6.* Berlin: Alexander Duncker. S.536-543.

Harnack, A. (1900a). *Geschichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Bd. 1. 2.Hälfte.* Berlin: Reichsdruckerei.

Harnack, A. (1900b). *Geschichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Bd. 2.* Berlin: Reichsdruckerei.

Harnack, A. (1911). *Aus Wissenschaft und Leben. Bd. 1.* Giessen: Alfred Töpelmann.

Haym, R. (1856). *Wilhelm von Humboldt. Lebensbild und Charakteristik.* Berlin: Rudolph Gaertner.

Humboldt, A. v. (Hg.)(1846). *Wilhelm von Humboldt's gesammelte Werke.* Berlin: G. Reimer.

Humboldt, W. v. (1851). *Ideen zu einem Versuch, die Grenzen der Wirksamkeit des Staates zu bestimmen.*

Koch, J. F. W. (1839). *Die preussischen Universitäten. Eine Sammlungen der Verordnungen, welche die Verfassung und Verwaltung dieser Anstalten betreffen. Bd. 1.* Berlin: Ernst Siegfried Mittler.

Köpke, R. (1860). *Die Gründung der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin.* Berlin: Gustav Schade.

Lenz, M. (1910). *Geschichte der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin. Bd. 1.* Halle: Waisenhaus.

Paletschek, S. (2001). Verbreitete sich ein 'Humboldt'sches Modell' an den deutschen Universitäten im 19. Jahrhundert? In R. C. Schwinges (Hg.), *Humboldt International. Der Export des deutschen Universitätsmodells im 19. und 20. Jahrhundert.* Basel: Schwabe.

Paulsen, F. (1885). *Geschichte des Gelehrten Unterrichts auf den Schulen und Universitäten vom Ausgang des Mittelalters bis zur Gegenwart.* Leipzig: Veit.

Paulsen, F. (1893). Wesen und geschichtliche Entwicklung der deutschen Universitäten. In W. Lexis (Hg.), *Die Deutschen Universitäten: für die Universitätsausstellung in Chicago 1893 unter Mitwirkung zahlreicher Universitätslehrer. Bd. 1.* Berlin: A. Asher.

Paulsen, F. (1894). Die deutsche Universität als Unterrichtsanstalt und als Werkstätte der wissenschaftlichen Forschung. *Deutsche Rundschau. Bd. 80.* S.341-367.

Paulsen, F. (1895). *The German Universities: Their Character and Historical Development.* New York: Macmillan.

Paulsen, F. (1902). *Die deutsche Universitäten und Universitätsstudium.* Berlin: A. Asher.

Paulsen, F. (1906). *The German Universities and University Study.* New York: C. Scribner's sons.

Perry, E. D. (1894). The University of Germany. *Educational Review, 7*, 209-231.

Roesler, H. (1873). *Sociale Verwaltungsrecht. 2. Abtheilung.* Erlangen: Andreas Deichert.

Rönne, L. v. (1855). *Das Unterrichts-Wesen des preussischen Staates. Bd. 2.* Berlin: Beit.

Rüegg, W. (1999). Ortsbestimmung. Die Königlich Preußische Akademie der Wissenschaften und der Aufstieg der Universität in den ersten zwei Dritten des 19. Jahrhunderts. In Jürgrn Kocka (Hg.), *Die Königlich Preußische Akademie der Wissenschaften zu Berlin im Kaiserreich.* Berlin: Akademie Verlag.

Schalenberg, M. (2002). *Humboldt auf Reisen? Die Rezeption des 'deutschen Universitätsmodells' in den französischen und britischen Reformdiskursen (1810-1870).* Basel: Schwabe.

Schlesier, G. (1845). *Erinnerung an Wilhelm von Humboldt. 2.Theil.* Stuttgart: Franz Heinrich Köhler.

Spranger, E. (1910). *Fichte, Schleiermacher, Steffens. Über das Wesen der Universität.* Leipzig: Dürr.

Wagner, A. (1896). *Die Entwicklung der Universität Berlin 1810-1896.* Berlin: Julius Becker.

Process of the Shaping the Idea of the German Modern University

Tsutomu KANEKO *

The purpose of this paper is to discuss on the shaping the idea of the German modern university. The memorandum with the title "*Über die innere und äussere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin*" is well known as the origin of the idea of the modern university. This memorandum was written by Wilhelm von Humboldt, and was found by Bruno Gebhardt at the archive of the Academy of Sciences in Berlin. He wrote "*Wilhelm von Humboldt als Staatsmann*" in 1896 and quated Humboldt's memorandum in it. Today it is said that the idea of the modern university by Humboldt was unknown in the 19th century, and the impact of his idea to the higher education all over the world is believed to be a mith.

However, it is certain that Humboldt's idea existed and was known to his contemporaries. Wilhelm Dieterici wrote a report whose title was "*Geschichtliche und statistische Nachrichten über die Universitäten im preussischen Staate*". This report was published in 1836. He said that Humboldt drafted a complete plan for the founding of the University of Berlin on May 12 1809. Humboldt intended to make a influential *studium generale* for German nation. This fact was reffered in the publications by Johann Friedrich Wilhelm Koch and Gustav Schlesier in the first half of the century.

Humboldt's memorandum is known as the plan for the establishment of the University of Berlin. But it must be the plan for the reorganisation of the Academy of Sciences Berlin. Just before the establishment of the University of Berlin, Alexander von Humboldt drafted a new statute of the Academy of Sciences Berlin. It contained a regulation that scientific research was the matter of the academy, teaching and spread of sciences were the matters of the university. Then W. v. Humboldt worked out a plan to transfer the research function from the academy to the university. As the result, the main duty of the Academy of Sciences Berlin was changed to the judgment of the activities of researchers.

Friedrich Paulsen wrote an article whose title was "*Wesen und geschichtliche Entwicklung der deutschen Universitäten*". This article was contained in Lexis' "*Die Deutschen Universitäten*". This book was published in 1893 for the Columbian Exposition in Chicago. Though Paulsen did not know the Humboldt's memorandum, he discussed the character of the German universities. He pointed out the nature of a German university that it was at once a workshop of the scientific research, and an institution for the highest scientific instruction. He could find out the character of German universities through the comparative study of English, French and German institutions.

Paulsen published "*Die deutsche Universitäten und das Universitätsstudium*" in 1902. He reffered Humbolds's plan in it. He said "I cannot refrain from quoting a few sentences from the sketch of a memorial

* Associate Professor, Graduate School of Education, Kyoto University

address in which Wilhelm von Humboldt, on assuming office, outlined his conception of the principles that should control the organization of a university". In this way the shaping of Humboldt's idea completed.

This result will explain some questions on higher education well, for example on the introduction of the German university model to Japanese higher education at the beginning of the last century.